

冷やさずに冷やす

エッセイ 大江戸エコロ帖
◆第二回◆

文／石川英輔

江戸の商店街で、店の人々が夏の夜に涼んでいる様子を描いた「江戸市街店頭夏夜之納涼」という絵をお目にかける。この絵の説明を現代語で要約すると、

「町内両側の店は、日暮れどきに商売をやめて、店先から道路全体にたっぷり打ち水をする。湯あみをして夕食を済ませると、どの家も涼み台を出しタバコ盆や団扇^{うちわ}などを用意して浴衣がけの夫婦子供が出て涼んだ。(中略)また、大人同士は世間話をし、子供たちも一緒に遊ぶ。宵の口まで毎晩こうやって涼むのが普通だった」

といったところだろうか。ちょっと羨ましいようだが、江戸時代ほど古い時代でない私の子供の頃の東京の住宅地でも、同じように夕涼みをしていたものだ。しかし、今の舗装道路に少し

図版／打ち水をした店先に出て、町内の人々が涼んでいる。膨大な電力を駆使して冷房をさらに冷やすという悪循環より、こちらの方が賢い冷やし方ではなからうか。「江戸府内絵本風俗往來」より

ぐらい水を撒いてもあまり涼しくならない。

昔の道路は土に砂利を入れて突き固めただけなので、地表のすぐ下はいつも湿っている。下の層から毛細管現象で水を吸い上げているからだ。水はコンクリートよりはるかに温度

が上がりにくいばかりか、熱せられて水分が蒸発するとき周囲の熱を奪って冷やす作用がある。その上へさらに打ち水をするのだから、温度を下げる効果が大きかった。

ところが、コンクリートの道路は、直射日光を受けると表面温度がすぐ55℃かそれ以上になるばかりか容易にさめず、打ち水しても表面を濡らすだけなので温度が下がりにくい。しかも、現代の町の中は、道路だけでなく鉄筋コンクリートの建物が多く、真夏の直射日光を受けると町全体が焼けたたれたようになるのはご存じの通りだ。

つまり、現在の都市が打ち水ぐらいでは気温が下がりにくい構造になっているのに対して、木造家屋が主だった昔の日本の町は真夏



でも温度が上がりにくく、日没後の路面にたっぷり打ち水をすれば、実際に真夏でもかなり涼しくなったのである。現代の真夏の都市は、冷房しないと耐えられないのに、冷房機で室内を冷やすと室外の温度が上がるばかりか、冷房機自体が熱源になるため、冷房をすればするほど気温が上がるという悪循環に陥っているのだ。

暑ければエネルギーを使って冷やそうとする現代文明は、自然界から強烈な反撃を受けてたじろいである。冷やさずに冷やしていた文化をもう一度見直せないものだろうか。

いしかわえいすけ
作家。著書に、江戸時代の資源やエネルギーの循環について紹介した「大江戸リサイクル事情」二「大江戸えねるぎ事情」などがある。

太陽光で動く飛行機



リビング・モティーフ (電話03-3587-2784) <http://www.livingmotif.com/>

ドイツのインプロソーラー社から登場したのは、太陽光でプロペラがまわる飛行機。羽のうえに付いたソーラーパネルが、太陽光を受けて発電します。木製ボディがやさしい感じ。将来、こんな飛行機ができたらぜひ乗ってみたいですね。同社は、知育性の高い製品を企画・制作。同じシリーズに、ヘリコプターと火星探査機も揃っています。デスクに置いて、しばし地球環境について思いをはせてみてください。

充電できるリュック



なにやらメタリックなリュックサックの前面。じつはソーラーパネルがはめこまれているのです。ここで太陽光を受けて発電すると、携帯電話やデジタルカメラに充電できます。超軽量太陽電池のパネルはフレキシブルで、しかも丈夫。太陽光さえあれば、世界中で使えます。ビジネスにもアウトドアにも大活躍してくれそうですね。これからは、モバイル機器の充電は太陽の下で！が当たり前になるかもしれません。

K weather Japan株式会社 [Reware Japan] (電話050-3682-2666) <http://www.rewarestore.jp/>

エコモノ

エコモノたちで、あなたの暮らしを彩りあるものにしてみませんか。

100%再生できるカトラリー



色あざやかなカトラリーステンレスのカトラリーが登場しました。塗料や染料を一切使わず、光の現象によって発色する不思議なカトラリーです。溶かしなくても有害物質が発生しないため、簡単に100%リサイクルできるといえるすぐれもの。製作した中野科学では、このほかにも鏡やタイルなど、同じ技術を用いた製品を開発していて、ひそかな人気。お気に入りの色のカトラリーを揃えて、長く愛用したいですね。

株式会社中野科学 (電話0256-62-2548) <http://www.sustain.jp/>